英語科における発音指導

丹下省吾・加藤　剛・高橋恵亮・倉田有邦

（Ⅰ）中学校1年生に対する発音指導の一方法

Ⅰ．研究目的

言語の第一要素は音である。特に外国語を学ぶ者にとっては，その国語の持つ音が母国語のそれとどのように異なるかを知って，早くそれに同化するようにつとめることが何よりもまず必要である。しかしながらわが国の英語教育の現況では，耳と口とを通じての学習がほとんど一般化して来たとはいえ，音そのものについての具体的な指導法が確立されているとは思われない。

昨年度は中学校全学年に発音（単音）の特別指導を試みたが，初歩段階におけるほど指導効果が上るという結果を得て，本年度は研究対象を1年生に限定した。英語の諸技能を円満に伸ばす上に正しい発音は欠くことができない。この研究はその有効な指導法を求めるためのものである。

Ⅱ．研究の方法と経過の概要

1. 昨年度（昭和32年度）の概要

本校英語科教官作成の聴別テストを7月初旬に実施し，また発音テストを作成して9月に実施した。この結果，困難音として聴別7組（s—θ，ʌ—æ，l—r，i—e，ŋ—m，z—ð，m—n），発音7個（æ，əː，v，ou，θ，ŋ，ʃ）を抽出した。これらの困難音には，英語では音韻的に区別されるにもかかわらず，日本人生徒が日本語の音で代用して区別をしないものが多かった。

この結果を参照した上で，中学校全6学級のうち各学年1，計3学級に発音の特別指導を実施して，特別指導をしなかった学級と比較した。特別指導の方法は各時間10分ずつに，類似音対比による聴別・発音の練習，蓄音器・録音器の使用，発音図の使用，発音器官の説明，宿題による関心の喚起，などの諸法を適宜組み入れた。効果的だったと思われるものは類似音の対比による練習，不便を覚えたものは聴覚器具の使用であった。

11月中旬に最初と同じテストを実施して指導効果を測定した。特別指導をした学級のほうが聴取・発音とも進歩の度合が著しく，また低学年になるほど著しい進歩を示した。全般から見ても，この特別指導は生徒に新しい目を開かせて有効であった。

2. 本年度（昭和33年度）の概要

昨年度の研究から得た結果に基づいて，本年度の目標を次のように定めた。

1. 中学校1年生を研究対象とする。両学級に同一方法で指導を行う。
2. 特殊な施設を使わずに有効にできる指導を行う。特に具体的な個々の場合の指導技術を工夫する。
3. 単音の発音指導から文の発音指導に及ぼす。

このような目標をもって実施してきた本年度の指導の概要は次のとおりである。

（1）入門期の指導（4月から5月約4週間）

"Standard Jack and Betty, I" の Introduction に準拠した発音及び文型

日本語化した英語の発音

Alphabet の発音

（2）聴取・発音の誤りの調査（6月中旬）

入門期より約10週を経過し，生徒も多少英語の音に親しみ，文字と結びつけて語いも若干できて来た時に単音及び文の抑揚・句切りについて発音・聴取テストを実施した。（表1）

テストの要領

単音の聴取テストは，それぞれの単語で目標とする音を類似音に変えたものを二種類用意し，正しいものとならべて計3個聞かせ，そのどれが正しいかを答えさせる。問題はテープ録音の再生，解答は筆記による。

（例）地図〔mʌp〕，〔mjæp〕，〔mæp〕

発音テストは，聴取テストに使用した単語を全部読ませて目標音のみを判定する。

抑揚及び句切りのテストも同じ要領による。

当然のことながら，このテストに使用した語句は既習の材料から進んだ。昨年度作成したテストと形式は似ているが，このテストは生徒がそれぞれの語の正し

（表１）聴取・発音テストに使用した単語および文

ねらい			ねらい		
〔æ〕	map	lamp	〔ei〕	name	raincoat
〔θ〕	thick	thin	〔s〕	six	sit
〔r〕	right	racket	〔l〕	glove	left
〔i〕	pin	it	〔e〕	egg	desk
〔ŋ〕	long	morning	〔n〕	mine	in
〔ð〕	this	that	〔ɔ:〕	ball	horse
〔m〕	some	am	〔ʃ〕	she	shoe
〔ou〕	no	window	（抑　揚）	Are you a pupil ?	
〔ə:〕	girl	her	（　〃　）	Jack has two balls.	
〔v〕	violet	very	（　〃　）	Whose umbrella is it ?	
〔f〕	five	fountain	（句切り）	She has some pencils in her pocket.	

（表２）困難音として選び出されたもの（正答60％未満）

聴取　〔n〕〔i〕〔ŋ〕〔l〕〔e〕〔r〕〔v〕〔s〕〔ɔ:〕〔ð〕〔ou〕〔θ〕〔ei〕

発音　〔i〕〔n〕〔ə:〕〔l〕〔ou〕〔ð〕〔θ〕〔r〕〔æ〕〔f〕〔v〕〔ei〕〔ŋ〕

注　〔n〕〔ŋ〕は語尾　〔s〕は〔i〕音に先行する場合

（表３）選び出されたものを類似音別に並べて指導に使った音の組

（A）〔n〕—〔ŋ〕　（B）〔i〕—〔e〕　（C）〔l〕—〔r〕　（D）〔ou〕—〔ɔ:〕　（E）〔v〕—〔b〕
（F）〔ð〕—〔z〕　（G）〔θ〕—〔s〕　（H）〔ei〕　（I）〔ə:〕—〔ɑ:〕　（J）〔æ〕—〔ʌ〕
（K）〔f〕—〔h〕

注　下線部は，困難音ではないが，対比のために補った音。〔ei〕は単独

い音を知っていることを前提としているのに対し，昨年度のものは音が同じであるか異っているかを区別する力を調べるものである。

このテストにより困難音を選び出し，それらを整理排列して指導の資料を作った。（表２～表３）

（3）困難音の指導

まとまった11組の音の指導に入ったのは１学期末であった。導入として最初の１時間には，日本語の音と英語の音とのちがい，それに注意することの大切さ，発音器官の重要さを話し合った。たとえば，日本語を習ったアメリカ人が使う日本語の音や話し方は自分たちのとどこがちがうか，それはなぜであうか，母音はアイウエオの五つだけだろうか。くちびるの形を色々変えてみたらどうであろうか。鼻をつまんで息が出ないようにすると，出しにくい音がありはしないだろうか，などである。

以後２学期を中心として単音の指導を行った。

毎時の指導過程

Review（20分）
　Recitation（Home Task）
　Questions and Answers
*Pronunciation（10～15分）
New Material（25分）
　Oral Introduction
　Test Questions and Answers
　Reading
　Explanation with Translation
Confirmation（5分）
　Reading
　Home Task

*発音の指導過程（10～15分）

(1) 困難音を含む既習単語の提示
(2) 発音の注意・説明　日本語音との比較
(3) 音の対比による聴取・発音練習
(4) 困難音を文の中へ入れて読み方練習

11組の困難音を上の指導過程に合わせて肉づけをし表４のような補助教材にしてプリントし，全生徒に毎時使用させた。なおこの教材作成にあたっては，小川芳男著「英語小発音学」（有精堂）を参照して益するところが多かった。このようにして（A）より（K）までの11組の単音を，１回につき１組の目標で，主として９月から11月の間に指導した。

（表４）補助教材

(A)〔n〕—〔ŋ〕

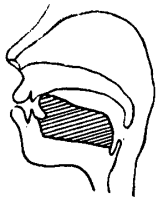
（例）〔n〕	〔ŋ〕
in, one, nine, name	long. king. living. pink
（注意）	
・舌の前のまわりを上の歯ぐきにしっかりつける。	・口をあけ舌の先を下げるが息は鼻から出る。
・息は口から出ずに鼻へ抜ける。	・そのまま音をのばすことができる。
・鼻をつまんだら発音できない。	・鼻をつまんだら発音できない。
・日本語の「ン」は舌が上へつかず，息は鼻と口との両方から出る。	・「ング」ではない。「ング」の「グ」を発音しようとして，せずにとめている一つの音。

（比較）

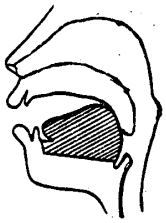
円「エン」，天「テン」，恩「オン」
n〔en〕，ten〔ten〕，on〔ɔn〕

（練習）

1. Good morning.
2. There is an icebox.
3. There is an apple in it.
4. What have you in your bag?
5. I have a long pencil.



〔n〕



〔ŋ〕

(B)〔i〕—〔e〕

（例）〔i〕	〔e〕
it, pin, big, Betty	egg, pen, desk, many
（注意）	
・「イ」より舌がゆるく低くなる。	・「エ」と似ているが，もう少し口を大きく開く。
・「エ」の口の形で「イ」を発音する気持。	
・「イ」と「エ」との中間音	

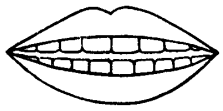
（比較）

「ピン」「ビッグ」
〔pin〕〔big〕
〔pen〕〔beg〕

（練習）

1. This is a pen.
2. It is a pen.
3. I am Mr. Smith.
4. The dictionary is very thick.
5. He has six eggs in his pockets.

〔i〕



〔e〕

(C)〔l〕—〔r〕

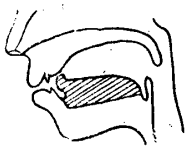
（例）〔l〕	〔r〕
lamp, left, sailor, apple.	right, rose, very French
（注意）	
・舌先を上の歯のうら，歯ぐきにつける。	・舌先を口の中へひっこめて上にまげる。
・舌の両横があいていて，息は両側から前に出てくる。	・しかし天井へはさわらない。
・「ウ」の音に似ている。	・息は天井と舌先との間を通って外へ出る。
・日本語の「ラ」行の音は舌先がもっと奥の天井へ軽くふれてはねる音。	・口の奥の方で発音する気持。
	・口は「ウ」を発音する形

（比較）

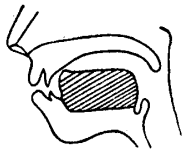
〔lア〕，〔lイ〕，〔lウ〕，〔lエ〕，〔lオ〕
〔rア〕，〔rイ〕，〔rウ〕，〔rエ〕，〔rオ〕
〔ラ〕，〔リ〕，〔ル〕，〔レ〕，〔ロ〕
lead〔li:d〕，light〔lait〕
read〔ri:d〕，right〔rait〕

（練習）

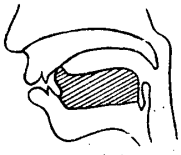
1. The ball is large.
2. She has a yellow tulip.
3. The bridge is very long.
4. My room is on the first floor.
5. What color is your umbrella?



〔l〕



〔r〕



「ラ」行
（日本語）

(D) 〔ou〕—〔ɔ:〕

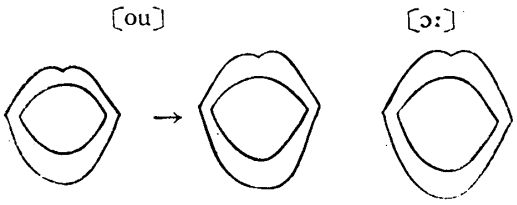
(例) 〔ou〕	〔ɔ:〕
no, rose, boat, window	horse, short, ball, story
(注意)	
・「オッ」	・「オー」よりもっと口を大きく開く。
・「オ」を強く発音し「ウ」を自然に軽くつける。	・親ゆびの広いはばぐらい口をあける。
・「王様」はかなで「オ，ウ，サ，マ」と書くが，発音は「オーサマ」となる。だから日本人は〔ou〕を「オー」と発音しやすいから気をつける。	

(比較)

脳「ノウ」，「コート」，「ホース」
no〔nou〕，coat〔kout〕，horse〔hɔ:s〕

(練習)

1. I have a notebook.
2. There is a boat in the picture.
3. The picture is on the wall.
4. Mr. Jones has a ball.
5. It is a small ball.



(E) 〔v〕—〔b〕

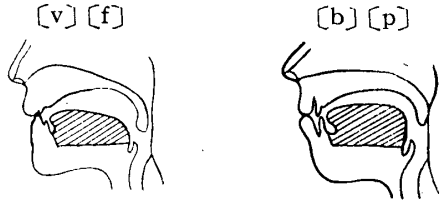
(例) 〔v〕	〔b〕
violet, very, seven, five	bat, book, about, table
(注意)	
・上の歯を下のくちびるにあててその間から息を押し出す。	・上下のくちびるを合わせてこれを破れつさせる。
・上のくちびるを使うのではない。前から見ると上の歯が見える。	・日本語の「バ」行の音にはどれにも〔b〕が入っている　。

(比較)

v〔vi:〕，vat〔væt〕，vase〔veis〕
b〔bi:〕，bat〔bæt〕，base〔beis〕

(練習)

1. He has a glove.
2. I have two balls in my bag.
3. This is my bedroom.
4. That is our living room.
5. The flower is a violet.



(F) 〔ð〕—〔z〕

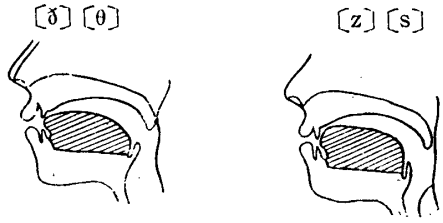
(例) 〔ð〕	〔z〕
this, they, father, with	is, rose, whose, pansy
(注意)	
・上下の歯の間に舌先を軽くはさみ，息をまさつさせながら押し出す。	・「ズ」に似た音。
・〔d〕の舌先を歯の合わせ目まで下げる。	・舌は天井にさわらない。

(比較)

座「ザ」，税「ゼイ」，字「アザ」
the〔ðə〕，they〔ðei〕，other〔ʌðə〕

(練習)

1. This is a daisy.
2. That is a pansy.
3. These are their cars.
4. His mother is in the suburbs.
5. We smell with our nose.



(G) 〔θ〕—〔s〕

(例) 〔θ〕	〔s〕
thick, third, bath, Smith	sailor, small, desk, class
(注意)	
・〔ð〕の澄んだ音。	・〔z〕の澄んだ音。

(比較)

thin〔θin〕，thick〔θik〕，mouth〔mauθ〕
sin〔sin〕，sick〔sik〕，mouse〔maus〕

(練習)

1. Mr. Smith is a pianist.

2. Is the book thick or thin?
3. School is over at three.
4. The bathroom is on the third floor.
5. There are six classes in our school.

(H) 〔ei〕

(例) eight, sailor, name, play

(注意)
・〔e〕を少し長く強く発音し，軽く〔i〕をつける。
・「エー」と同じ音をのばすのではない。

(比較)
「セーラー」 「ネーム」 「プレー」
sailor〔séilə〕, name〔neim〕, play〔plei〕

(練習)
1. They are sailors.
2. We play baseball.
3. The lady's name is Kate.
4. I like grapes very much.
5. There is a raincoat by the table.

(I) 〔ə:〕—〔ɑ:〕

(例) 〔ə:〕	〔ɑ:〕
girl, first, learn, her	garden, father, class, car

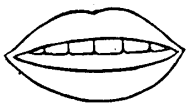
(注意)
・〔i:〕の口の形で「アー」という気持。
・「アー」「エー」「オー」をまぜたような音。

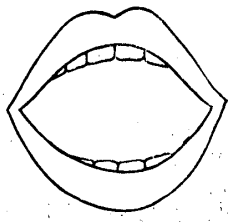
・「アー」を口を大きく開いて奥の方で発音する。

(比較)
fast〔fɑ:st〕, bard〔bɑ:d〕, card〔kɑ:d〕
first〔fə:st〕, bird〔bə:d〕, curd〔kə:d〕

(練習)
1. There are three birds.
2. The merchant has a car.
3. The girl is in Chicago.
4. She has a flower in her hand.
5. We learn English at school.

〔ə:〕 〔ɑ:〕





(J) 〔æ〕—〔ʌ〕

(例) 〔æ〕	〔ʌ〕
apple, cat, map, Jack	under, other, some, much

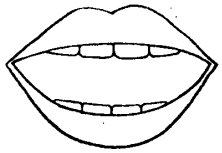
(注意)
・「エ」と「ア」とを一つにしたような音。
・のどから強くものをはき出す感じの音。

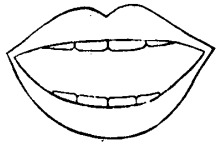
・口の奥でみじかく「ア」という。

(比較)
but〔bʌt〕, cup〔kʌp〕, much〔mʌtʃ〕
bat〔bæt〕, cap〔kæp〕, match〔mætʃ〕

(練習)
1. These are my hands.
2. There is a map on the wall.
3. I have a black cap.
4. His factory is in front of the school.
5. Can you play the piano?

〔æ〕 〔ʌ〕





(K) 〔f〕—〔h〕

(例) 〔f〕	〔h〕
four, front, coffee, golf	horse, have, how, here

(注意)
・〔v〕の澄んだ音。

・寒い時，かじかんだ手にあたたかい息を吹きかける時の音。

(比較)
five〔faiv〕, fill〔fil〕, food〔fu:d〕
hive〔haiv〕, Hill〔hil〕, hood〔hud〕

(練習)
1. We have five fingers.
2. It is my father's factory.
3. It is five miles from here.
4. There are many flowers in the garden.
5. I play football and softball.

指導上の留意事項

(A) 〔n〕—〔ŋ〕

問題になるのはどちらも語尾に来る時である。日本語の撥音「ン」はこのどちらの音ともちがう。

〔n〕が語尾にある時に日本語の「ン」を出す生徒が多い。後続する語が母音で始まる時にその弊が明瞭にあらわれる。練習もそのように in it とか an apple など母音がつづくよう工夫した。

〔ŋ〕は「ング」と発音され易いので注意。

（B）〔i〕—〔e〕

むずかしいのは子音よりもむしろ母音である。舌や歯の接触や摩擦などによって明確に区別できる子音のちがいよりも，舌の位置やくちびるの形のわずかな変化によって差別されるべき，母音のほうが捕捉しにくい。〔i〕の音もそのよい例である。

日本語の「イ」に似ているのはむしろ〔i:〕のほうで〔i〕と〔i:〕とは長さのちがいではなくて音の質のちがいである。音そのものが異なる。ところが日本語には「イ」一つしかない。これが〔i〕を「イ」と発音し，「エ」と聞きちがえる原因である。プリントのような minimal pairs を使って比較させたが，ならべて聞けば区別できるが発音はまだなかなか困難である。

（C）〔l〕—〔r〕

日本人の発音の欠陥として最もよく指摘されるものの一つであるが，どのように異なるかは，図示すると共に類似の組を作って並べて聞かせると割合に判りやすい。

語尾の〔l〕を日本語式にはねて「ル」（ボール，さる，など）とせぬよう指導することが大切で，そのためには舌の先を思いきって前へ出させる。

（D）〔ou〕—〔ɔ:〕

「オ，ウ」と書いて「オー」と発音する日本語音の傾向が二重母音〔ou〕の正しい発音を阻害している。

〔ɔ:〕もやさしいようで困難な音である。英語に比して日本語の音は口の形の変化が少ないのではなかろうか。〔ɔ:〕ばかりでなく，〔u:〕あるいは〔w〕にもそのことがいえると思われる。

（E）〔v〕—〔b〕

〔v〕は比較的容易に発音できる。「注意しておれば」できないことはない。ただし，上くちびるを使って〔v〕を出そうとする生徒が往々にしてある。これでは〔b〕になってしまう。上のくちびるがなくても〔v〕は発音できることを知らせる。そのためには，指で上くちびるを押し上げておいて発音させてみるとよい。

（F）〔ð〕—〔z〕

〔ð〕も注意すればどうにかできる。〔d〕になり勝ちな生徒もいるが，〔z〕よりもよい。〔ð〕と〔z〕の区別は後者がずっと摩擦音が強いことを知れば楽である。

〔z〕はむずかしくはないが，〔dz〕との混同には注意しなければならない。cars と cards との語尾音のちがいも，日本語の「ズ」，「ヅ」が大部分「ズ」に統一された現在，折を見て触れておく必要がある。

（G）〔θ〕—〔s〕

前の組の無声音で別に変った方法もとらなかった。ただ〔i〕〔i:〕の前の〔s〕は〔ʃ〕と対比して訓練する必要もある。

（H）〔ei〕

〔ou〕と同じく長母音にならぬよう気をつける。

（I）〔ə:〕—〔ɑ:〕

〔ə:〕の音を出すこと自体はそれほどむずかしくはない。また〔ɑ:〕と並べて区別することはきわめて容易であり聴取テストでも成績がよい。しかし，これを文の中で，努力せずに無意識に発音する段になると，逆にきわめて悪い。

これも日本語の母音が五音しかない故である。日本語に入れたら訛りか方言音としか感じられない〔ə:〕を発音することに，生徒は一種の恥かしさを感じているようである。これが英語の標準音であり〔ɑ:〕と発音すれば誤りであるということを知らせる。

（J）〔æ〕—〔ʌ〕

苦労するのは〔æ〕のほうであるが，幸い名古屋地方の方言にこれとそっくりの音がある。指導にはこれを利用した。

また〔æ〕を〔jæ〕とする傾向も強いのでこの矯正にもつとめた。たとえば map を〔mʌp〕,〔mjæp〕,〔miəp〕などと発音する者が非常に多い。これらはどれもいけない。かなにすれば「マップ」でも「ミャップ」でもない。「メァップ」「メァプ」が最も近いであろう。同様に cap，cat も「ケァプ」「ケァト」のほうが「キャップ」「キャット」よりも適当であると思われる。このあたり，日本語化した英語の音やかな書きの影響が大きいことがわかる。

（K）〔f〕—〔h〕

〔f〕は〔v〕と同じ要領である。この教材では〔f〕を〔h〕と対比させたが，実際には，たとえば〔fil〕を〔hil〕と発音する誤りは少なくて，くちびるを丸めて〔hu〕のような音で始め，〔huil〕のごとくする者が多い。

Ⅲ　研　究　結　果

12月末現在，単音の困難音の反復指導に一段落をつけて，単語の中の音調の glide について指導中である。今後，年度内に予定していることは，文の種類別による抑揚，文全体のリズム，単語及び文の stress の位置，などについての簡単な指導を，図示や拍子をとることによって行うことである。したがって，ここに結果として記し得ることは単音の分のみである。

数字に表われた結果としては，一通り単音の指導を終えた10月中旬の聴取・発音テストのそれがある。このテストは6月に実施したものと全く同一のものであり，中学校1年生全体の正答率を全部の音について平均して第1回と比較してみると次のようになる。

聴取　54→63(%)　　進歩の度合　9

発音　46→67(%)　　進歩の度合　21

この数字から得られる結論は，聴取・発音の技能は共に進歩しているが特に発音の面でそれが著しいということである。聞きわけることは努力してもなかなかうまく行かないが，発音する方は正しい方法がわかってそれに気をつければ比較的容易である。それがこのテスト結果によく出ており，これまで行って来たことはこのように特に発音の面で大きな効果があった。

なお，数字の上での結果以外にこの指導を行った過程の中で得た体験や感想が数々あり，それらの方がより重要であるかと思われるので，以下に列記したい。

1.　毎時10分～15分を発音指導にあてること

この結果，他の技能の低下を招きはしないかという懸念があったが，その弊は認められない。10分なり15分なりを使うといっても，全く異質のものを他から入れるわけではない。それどころか，一般に時間中随時それも無計画になされているものを系統的，計画的にして工夫したものであって，このほうが有効である。特に中学校1年生において重点的に訓練することは絶対に必要である。

2.　発音記号の使用

困難音に関係ある発音記号はその都度プリントを通じて指導して来た。記号を中学生に紹介するのは1年生の半ばを過ぎてから，換言すれば，綴字に対して生徒の頭が固定してからがよいと考えているので，このような手順をとった。今後，この他のものを少しずつ教えて，あとで一括してまとめるつもりである。

3.　補助教材のプリント使用

これは例語や例文の板書の時間を省く上に大いに役立った。必要に応じて，生徒の予習復習にも便利である。発音の drill book のたぐいは市販でもあるが，中学校1年生程度にはむずかしすぎるものが多い。既習語句とにらみ合わせて教師が作ってやったほうがどれだけ有益であるか知れない。

4.　綴字と発音との関係

プリントの（例）に下線を附して両者の関係を考案できるように意図したが，まだこれについて多くをいう時期ではないと思う。混乱を招かぬよう軽く触れることが望ましい。

5.　発音の仕方の説明

ほんのわずかなヒントを与えるだけで，発音が大きく改良されることがある。くわしい発音法をいう必要はないし，いえば混乱するだけである。（注意）に示したことはヒントの例であるが，なお適切な指示の仕方も工夫されようし，生徒に考えさせることもできよう。

6.　日本語音との比較

我々は無意識に日本語の音だけをことばとして用いその音の範囲内で意味を区別している。人間個々の声が異なるのと同様に，各国語の音韻組識は異なっているのであるから，その音と日本語の音とを比べてみなくてはならない。そのためには指導者が前もって比較研究をしておくことが必要である。そして，その相違を簡潔適切に指示して，混乱しないよう指導することが望ましい。またこの意味において，英語を指導する者は日本語音の知識をも備えなくてはならない。

7.　attention pointer の移動

プリントの（練習）は注意を他へ向けるために作ったものである。一つの音にある程度習熟して発音できるようになっても，それを他の音の集りの中へ，すなわち文の中へ入れると，注意が別の語や音に散って，覚えたはずの音がくずれることが多い。文中に入れて読ませることはそういう訓練になる。ただし，今度の指導の経験によると，この文が長過ぎたり多すぎたり未習の語を入れたりすると，生徒はそれをむずかしいと決めてしまって，目標の音から注意がそれ過ぎることがわかった。過ぎたるは及ばざるが如し，である。未習の語は，必要に応じて（比較）の欄にも使ったがやはりこれにはかなりの抵抗がある。

8.　興　　味

毎日単調な訓練の繰返しばかりでは興味をそぐ。音と関連して日本語化した英語，外国人が話す日本語，日本語の方言の音，英語以外の外国語の珍しい音などについて話したり，くちびるなどの発音器官の実験考察をさせたりして変化を持たせ関心を高めた。

9.　恥しさの除去

上級生に比べて1年生ではまだそれほどでもないがそれでも何名かは英語らしい発音をすることにしりごみする者がある。この恥しさを取除くためには，指導

者への信頼感と全生徒の理解協力が必要である。

10. 聴覚器具の使用

最初の目標に掲げたように，今年度は特別の施設や器具をあまり使用しなかった。しかしこれは，それらの施設や器具を欠いていたり利用法に検討の余地が残されていたためであって，今後，発音練習室の設置や有効な録音器利用法が得られれば，それにこしたことはない。その方面の研究も進めたい。

Ⅵ 結　　論

英語学習の目的は何であろうか。これに対する解答は，外国語として英語を学習せしめている各国の間でも，その国情に応じて異なるであろう。我が国では，窮極のところ読解力の養成にその目標を置かざるを得ないかもしれない。しかしながらそのために，聞いたり話したりする技能の訓練がまだ軽視され過ぎてはいないだろうか。口頭による英語学習が，読解力や書く力の養成にも訳読式より遙かに益のあることはすでに認められているところであるが，それのみならず，我々は生きた英語を聞いたり話したりすること自体に大きな価値を認めなくてはならない。語法の文法的解釈や用語の選択など，英語国民ですら迷う問題に悩むことにも，それなりに意義はあろう。しかしそれよりも前にまず，指導者も生徒も，英語の音に親しむべきではなかろうか。それが「英語を知る」第一歩であろう。

その意味で発音指導法の問題は，些細に過ぎることのように見えても，実は，何よりも先に考慮されるべきことである。生きた英語を通じて生徒をこの外国語の分野に導き入れて行くために，その音の研究と訓練とはさらに重んじられければならない。従来の教材の内容も排列もこの線に沿って改められて行くべきであろう。我々がこの研究から得た先述の体験の数々や次の結論は，今後我々がとるべき発音指導の方法に手がかりを与え，ひいては，将来の英語教育の行き方に一つの示唆を与えるものであると考える。

発音の基礎は中学校1年生で正確に指導すべきである。そのためには漫然としてではなく一つずつていねいに発音の仕方やそれから出る音を指導する必要がある。そして，ここにとった方法は最善とはいえないにしろ極めて効果あるものであり，なお検討実施される価値を有するものと思われる。

（Ⅱ） 聴取テストにあらわれた類似音聴別の問題点

Ⅰ 研 究 目 的

英文を耳にした場合，その意味が理解できなくてもこの同じ文を文字にしてみると簡単にわかる——このような経験は英語学習者には珍しいことではない。用いられている単語が決して未知のものではないにも拘らず，耳で聞いた場合に理解し難いのは，根本的にはその音によく親しんでいないからであろうと思われる。個々の音，その音の連なり，スピード，リズム，これらの要素が一体となって一つの意味を作り出す。外国語を習う場合，我々は先ずその個々の音を知らなくてはならない。この個々の音を聴く場合に生徒はどのように困難を感ずるか，これを調査しようとして作ったのが，昨年度実施した聴別テストである。

このテストを通じて，どの類似音をききわけるのに生徒が困難を感ずるかを大ざっぱに知って，昨年は指導に役立たせたのであるが，その同じ資料をもう少し細かく分析して，解答の類別に整理し，考察してみようというのがこの研究のねらいである。

Ⅱ 研究方法及び経過

本校英語科においては，昨年（32年）「英語教育における発音指導」と題して研究発表を行ったが，その研究に際して一つの聴取テストを作成した。これは

Test of Aural Perception in English for Japanese Students (English Language Institute, University of Michigan)

の形式，内容を参考として20組の音を決定し，その音を含む80組を排列して本校英語科教官がテープレコーダーに録音したものである。（別表1）

この問題の1番から80番までの単語を生徒にきかせこの3個ずつの音がそれぞれ全部同じであるか，どれとどれが同じ語にきこえるか，あるいは全部別々の音にきこえるかを筆答させた。

類似音の種類としては20種類だけで表の左端の1番から20番までである。これを横に見ると，（例えば1番，21番，41番，61番）すべて同じ音の組に関するテストである。

昨年はこの20種類の音を横に4個ずつまとめて，各

類についてどの程度の正答率が得られたかを簡単に調査した。（別表Ⅱの一番右の欄の数字）

今回はこれを一つ一つ切り離して，例えば第1類（〔ɔ:〕と〔ou〕）はまとめて正答率63であるが，1番はどのような率か，21番はどんな結果を示しているか，同じ音の組であるのにどういう原因でそのような違いがあるか，これらの点について考えてみたわけである。

Ⅲ 考　　察

(1) 全体的に20種類を眺めてみてわかること。各種類の中でねらいとする2音のみの比較で3個一組を作って比較したものについては，

1. 〔ɔ:〕と〔ou〕 1. 41 区別が難しい。
2. 〔f〕と〔h〕 2. 62 易しい。
3. 〔ɑ:〕と〔ə:〕 23. 63 易しい。
4. 〔s〕と〔θ〕 44. 64 難しい。
5. 〔ʌ〕と〔æ〕 5. 25. 45 比較的難しい。
6. 〔l〕と〔r〕 6. 46. 66 極めて難しい。
7. 〔e〕と〔ei〕 47. 67 区別し易い。
8. 〔ŋ〕と〔n〕 8. 28. 68 本来難音だと予想されるが，吹き込んだ音が必要以上に区別されたため結果はよかった。
9. 〔i〕と〔e〕 9. 49. 69 比較的難しい。
10. 〔ʃ〕と〔s〕 10. 30. 50 やや難しい。
11. 〔tʃ〕と〔t〕 11. 51. 71 易しい。
12. 〔e〕と〔æ〕 12. 32. 72 易しい。
13. 〔ŋ〕と〔m〕 53. 73 これも8と同じことがいえる。
14. 〔dʒ〕と〔d〕 14. 54. 74 易しい。
15. 〔i:〕と〔i〕 15. 55. 75 易しい。
16. 〔b〕と〔v〕16. 36. 56. 76 語尾では難しいが語頭にくると大体易しい。
17. 〔z〕と〔ð〕 37. 77 極めて難しい。（ただし語尾のみからみて）
18. 〔u:〕と〔u〕 18. 58 易しい。
19. 〔m〕と〔n〕 19. 59. 79 難しい。
20. 〔dʒ〕と〔z〕 20. 40. 80〔i〕音の前では難しいが〔u〕と結びつけると易しい。

(2) 今見てきたところは，それぞれ4組ずつあるものの中から純粋に2音のみで構成した組の正答率の考察である。しかし大部分の類の中には，それ以外の要素を加えた組が入っている。例えば全く同じ1個の音を入れただけの組，あるいは目標とする2音以外にもう1つの音を加えて，3種類の音で構成した組である。この結果はどのように現われているであろうか。

① 全く同じ音の語を3つ並べた場合，大体よい結果が出ている。

21. 22. 3. 24. 65. 26. 27. 48. 29. 70. 31. 52. 33. 34. 17. 38. 60の各番。例外22. 23

同一のものを3個並べた場合に結果がよかったのは，元来ききわけるのが困難で，異っていても同一に聞きあやまり易いのであるから，同じものを並べて同じにきこえるのは極めて当然であると思う。

② 目標とする2つの音を含めて3つの音を並べた場合，すなわち3つとも別の語を並べた場合。

これは余り多く組み入れなかったが，大観してみると，結果は悪い。

61. 42. 43. 4. 7. 13. 15. 57. 78. 39

ねらいとする2音に第3音を入れた場合に，それがどのような効果を前の2音の聴別力に及ぼすかを見ようと思ったが，まとまった結果は得られなたった。類似の2音に加えた第3音が全く異質のものならば，ねらいとする類似2音が混同され易くなることも考えられようが，加えた音がまた比較的前二者と似ているため，結果は様々であった。

例，61番〔ɔ:t〕〔out〕〔oud〕

〔t〕と〔d〕の区別がはっきりしているため，目標の〔ɔ:〕と〔ou〕が同じにきこえる。

35番〔i:z〕〔iz〕〔æz〕

〔i〕と〔æ〕との区別がはっきりしているため，目標の〔i:〕と〔i〕とが区別し難くなる。

また42番〔fould〕〔hould〕〔sould〕では目標音は〔f〕と〔h〕であるが追加した〔s〕が〔f〕と似た摩擦音であったため，かえって〔f〕と〔s〕とが混同してしまった。

(3) ある子音が語尾にきた場合と，そのあとにアクセントのある母音を伴っている場合とでは，その類似子音を区別する困難度がどう変るか。

例，44番と64番との比較

44番では〔s〕〔θ〕が語尾に来て，正答率22

64番ではそれらが母音の前にあって正答率63

16番と36番，56番，76番との比較

語尾の16番は正答率29％

他の3つは70％代

19番，59番と79番との比較

19番，59番では平均40％

79番では55%——しかし，これは母音の前にきても案外よくない。

(4) ある子音の後に続く母音の種類が異ると，その類似子音の聴別にどの程度の困難度の差が認められるか。これは例が乏しいので表から断定的なことはいえぬが，

20番，40番と80番とを比較した場合，

〔z〕〔dʒ〕に〔i〕あるいは〔iː〕音が続いた場合よりも〔uː〕音が後続した方がずっと区別し易い。これは一般でも考えられていることだと思う。

(5) その他に気がついたこととして，

14類と20類とを比較してみると

〔dʒ〕と〔d〕との区別の方が〔dʒ〕と〔z〕の区別よりし易い。これは〔dʒ〕と〔z〕とはいずれも摩擦音であるのに対して〔d〕は破裂する音で異質であるから聞きわけ易いと思われる。

同様の理由で10類より11類の方がよいといえる。

(6) このほかにも，アクセントの有無などによって聴別の結果に相違はないかと思ったが，上に述べた語尾子音の程度で，他は資料不足で出来なかった。

以上こまごまと述べてきたが，次にあげるような難点もあって，全く十分なものと言えないのはまことに残念である。

① 最初からこのように分析するつもりではなかったので situation の変化に乏しい。

② 教官側の発音も絶対に正確とはいいきれない。

③ 文でなくて単語として出題したために，普通以上の強調をした個所もあった。

④ 肉声でなくテープを通してきかせた。

Ⅳ 研究成果

このテストを考察して我々は次のようなことを学んだ。

(1) 同じ音でも，それが異った situation（例えば word, sentence）の中へ入れられた時には困難度が異る。従って指導者はそれらを考慮に入れて発音指導をしなければならない。

(2) 同様の理由で，近ごろ導入されて来ている音の contrastive pairs を作るのにも，神経を配らなければならない。前後音をよく考えて作ることが必要である。

(3) 指導に当っては，細部の音の違い，特にアクセントのない子音は，学習の初期にていねいに説明することが効果を高める。

(4) 具体例では，聴取の面における〔f〕—〔h〕，〔aː〕—〔əː〕などが案外区別し易いのに対し，〔m〕—〔n〕などは意外に区別し難いので注意しなければならない。

(5) 日本語の音で類推することの危険性を強調することが大切である。

(6) テープレコーダーを使用することも一長一短がある。

我々は従来，英語発音の困難点に関しては，あるいは書物により，あるいはその他の種々の機会を通じて理論的にはかなりよく教えられ，学んできた。しかし今度の調査により，難点はあったにせよ，我々が実際に教えている生徒を通じて，それをある程度実地に学び得たことは大いに意義があったものと思われる。

（別表1）　聴取テスト問題　（記号は国際音声記号）

(1)	〔ɔː〕—〔ou〕	1	bɔːt bout bɔːt	21	sou sou sou	41	kɔːl koul koul	61	ɔːt out oud
(2)	〔f〕—〔h〕	2	fiə fiə hiə	22	hæt hæt hæt	42	fould hould sould	62	feil heil feil
(3)	〔aː〕—〔əː〕	3	pəːs pəːs pəːs	23	fəːst fəːst faːst	43	staː stəː stɔː	63	aːk əːk aːk
(4)	〔s〕—〔θ〕	4	sɔːt θɔːt tɔːt	24	maus maus maus	44	juːθ juːs juːθ	64	siŋ θiŋ siŋ
(5)	〔ʌ〕—〔æ〕	5	mʌtʃ mʌtʃ mætʃ	25	læk lʌk lʌk	45	æs æs ʌs	65	ʌ́ŋkl ʌ́ŋkl ʌ́ŋkl

(6)	〔l〕— 〔r〕	6	glɑ:s grɑ:s glɑ:s	26	ri:d ri:d ri:d	46	rɔŋ lɔŋ rɔŋ	66	klaud klaud kraud
(7)	〔e〕— 〔ei〕	7	pein pen pæn	27	eit eit eit	47	weit wet wet	67	eidʒ edʒ eidʒ
(8)	〔ŋ〕— 〔n〕	8	rʌn rʌn rʌŋ	28	win win wiŋ	48	tɔŋ tɔŋ tɔŋ	68	sʌŋ sʌn sʌn
(9)	〔i〕— 〔e〕	9	beg big beg	29	it it it	49	til tel til	69	itʃ etʃ itʃ
(10)	〔ʃ〕— 〔s〕	10	si: si: ʃi:	30	ʃíŋgl síŋgl ʃíŋgl	50	ʃip ʃip sip	70	si:t si:t si:t
(11)	〔tʃ〕— 〔t〕	11	tip tʃip tʃip	31	mǽtiŋ mǽtiŋ mǽtiŋ	51	kóutiŋ kóutiŋ kóutʃiŋ	71	tʃi:k tʃ:k ti:k
(12)	〔e〕— 〔æ〕	12	men men mæn	32	bǽtə bǽtə bétə	52	ænd ænd ænd	72	læs les læs
(13)	〔ŋ〕— 〔m〕	13	sʌm sʌŋ sʌn	33	slʌm slʌm slʌm	53	hæm hæm hæm	73	brim briŋ brim
(14)	〔dʒ〕— 〔d〕	14	dʒi:p di:p dʒi:p	34	dim dim dim	54	diɡ dʒiɡ diɡ	74	dju:s dju:s dʒu:s
(15)	〔i:〕— 〔i〕	15	di:d did did	35	i:z iz æz	55	i:t it it	75	hil hi:l hi:l
(16)	〔b〕— 〔v〕	16	rouv rouv roub	36	véri béri béri	56	væn bæn bæn	76	vein vein bein
(17)	〔z〕— 〔ð〕	17	reiz reiz reiz	37	klouð klouð klouz	57	waiz waið waid	77	ti:z ti:ð ti:z
(18)	〔u:〕— 〔u〕	18	fu:l ful fu:l	38	kud kud kud	58	pu:l pul pul	78	wu:d wud wə:d
(19)	〔m〕— 〔n〕	19	æm æn æn	39	si:m si:n si:l	59	ðem ðen ðen	79	mu:n mu:n mu:n
(20)	〔dʒ〕— 〔z〕	20	zi:l zi:l dʒi:l	40	dʒip dʒip zip	60	dʒest dʒest dʒest	80	dʒu: zu: zu:

（別表２）

聴取テスト正答率

（○は正答）

類		番	1-2	1-3	2-3	1-2-3	0	番	1-2	1-3	2-3	1-2-3	0	番	1-2	1-3	2-3	1-2-3	0	番	1-2	1-3	2-3	1-2-3	0	類別正答率
1	〔ɔ:〕—〔ou〕	1	1	⑥③	14	15	1	21	2	9	6	⑧③	0	41	3	7	④⓪	49	1	61	24	4	7	4	⑥①	63
2	〔f〕—〔h〕	2	⑨⓪	2	0	3	5	22	26	16	4	⑤③	1	42	27	50	2	0	②①	62	2	⑨③	2	2	1	64
3	〔ɑ:〕—〔ə:〕	3	1	4	5	⑧⑨	1	23	⑨⓪	2	1	5	2	43	1	4	46	1	④⑧	63	2	⑧⑧	1	2	7	79
4	〔s〕—〔θ〕	4	69	2	1	1	②⑦	24	3	6	2	⑧⑨	0	44	13	②②	5	60	0	64	10	⑥③	9	14	4	50
5	〔ʌ〕—〔æ〕	5	⑤⑧	17	1	19	5	25	6	20	⑤⓪	23	1	45	⑤⑤	12	8	16	9	65	3	9	7	⑧①	0	61
6	〔l〕—〔r〕	6	6	①②	22	59	1	26	4	4	8	⑧⑧	0	46	25	21	②③	25	6	66	①⑨	7	3	70	1	36
7	〔e〕—〔ei〕	7	1	0	10	1	⑧⑧	27	2	3	3	⑨①	1	47	0	3	⑨②	5	0	67	0	⑨⓪	2	1	7	90
8	〔ŋ〕—〔n〕	8	⑨⓪	1	1	3	5	28	⑧⓪	2	0	16	2	48	2	4	12	⑧②	0	68	0	2	⑨⑦	0	1	87
9	〔i〕—〔e〕	9	7	④⑧	20	14	11	29	3	2	10	⑧④	1	49	1	⑤⑤	37	6	1	69	7	⑤⓪	10	16	17	59
10	〔ʃ〕—〔s〕	10	⑦③	5	3	11	8	30	3	⑤③	26	15	3	50	⑤⑥	4	3	35	2	70	8	5	6	⑧①	0	66
11	〔tʃ〕—〔t〕	11	0	3	⑧⑦	6	4	31	6	2	5	⑧⑦	0	51	⑨⑦	0	0	0	3	71	⑨④	3	1	0	2	91
12	〔e〕—〔æ〕	12	⑦④	2	2	18	4	32	⑧②	3	3	12	0	52	1	0	3	⑨⑥	0	72	0	⑨⑦	3	0	0	87
13	〔ŋ〕—〔m〕	13	2	73	12	3	①⓪	33	15	9	41	③⓪	5	53	9	5	⑥⑧	13	5	73	3	⑧⑧	0	0	9	49
14	〔dʒ〕—〔d〕	14	0	⑧⑦	2	1	10	34	3	10	7	⑦⑨	1	54	0	⑧⑤	6	3	6	74	⑨④	2	0	0	4	86
15	〔i:〕—〔i〕	15	0	0	⑨②	4	4	35	39	1	2	0	⑤⑧	55	6	2	⑦⑧	8	6	75	2	4	⑧⑧	2	4	79
16	〔b〕—〔v〕	16	②⑨	22	5	36	8	36	2	9	⑦⑧	8	3	56	4	6	⑦⓪	19	1	76	⑦⑦	11	4	2	6	64
17	〔z〕—〔ð〕	17	2	15	9	⑦④	0	37	①⑨	2	9	69	1	57	7	18	16	0	⑤⑨	77	8	②⑥	4	59	3	45
18	〔u:〕—〔u〕	18	1	⑧⑨	4	2	4	38	3	14	8	⑦④	1	58	1	13	⑦③	2	11	78	2	1	0	1	⑨⑥	82
19	〔m〕—〔u〕	19	2	12	③⑥	48	2	39	48	3	4	3	④②	59	5	11	④④	39	1	79	⑤⑤	3	5	33	4	44
20	〔dʒ〕—〔z〕	20	②②	59	2	8	9	40	⑤①	8	10	14	17	60	5	3	9	⑧③	0	80	0	3	⑨④	2	1	63